

ザ・コラム

The column



根本 清樹 (編集委員)

1945年8月14日、昭和天皇の「聖断」によって最終的に受諾が決まったポツダム宣言に、次のくだりがある。

日本国民の間の「民主主義的傾向ノ復活強化」を日本国政府は推し進めよ、と。

大正デモクラシーや憲政常道といった言葉で語られる戦前の議会政治、政党政治は、いかにして滅びたのか。

それは現代の私たちにとって、なお切実な問いであり続けている。

歌人と謝野晶子の詩「駄獣の群」^{だじゅうぐん}。1915 (大正4) 年初出。苛烈^{かたつ}きわまる議会批判の作である。

「此処に在る者は／民衆を代表せずして／私党を樹て、／人類の愛を思はずして／動物の利己を計り、／公論の代りに／私語と怒号と罵声とを交換す。」

時は第2次大隈重信内閣、しかしここにみられるような政党不信、政治家ぎらいは時代を超えて絶えることがない。

新党日本の田中康夫代表は初めて読んだ時、「これはすごい」と思ったという。

6月、税と社会保障一体改革をめぐる政府与党の大詰めの会議で、その結びの一節を引きつつ消費増税に非を鳴らした。

「われわれの正義と愛、／われわれの血と汗、／われわれの自由と幸福は／最も臭く醜^{みにく}き／彼等^{かれら}駄獣の群に／寝藁^{ねわら}の如く踏みにじらる……」

与党の一員ながら時に歯に衣着せぬ「諫言」も辞さない。そのとき田中氏が範とするのは、戦前活躍した衆院議員齋藤隆夫である。同じ兵庫県選出。軍部が増長し政治が萎縮するなかで、いわゆる肅軍演説、反軍演説を残し、議会史に輝く。

政治が有権者に見放されかけているいま、齋藤のような「哲学と覚悟のある政治家」こそが必要だと、田中氏はいう。

政治史の教訓が生々しい

「駄獣の群」?

晶子の詩を田中氏が会議で披露したとき、直ちに撤回と謝罪を求める同席者があつた。仙谷由人官房副長官である。

会議の主役、与謝野馨担当相は言わずと知れた晶子の孫であり、嫌がらせにもほどがあると怒つたのだった。

仙谷氏といえは、歴史を学ぶ政治家として永田町でも指折りだろう。

民主党政調会長だった2005年、当時の岡田克也代表の意を受けて党内に近現代史の調査会をつくり、この分野の大家らを次々招いた。その後も同志とともに政権交代直前まで勉強会を続けた。

そこで仙谷氏が強く印象づけられたのは、政党が、そして議会が自滅していく道行きである。

分水嶺ぶんすいれいは1930（昭和5）年にあつた。民政党的浜口雄幸内閣がロンドン海軍縮約に調印すると、政友会の鳩山一郎らはあるうことか軍部になりかわってこれを弾劾だんがいした。「統帥権干犯」問題である。

当時の二大政党の足の引っ張り合いのすさまじさは音に聞こえる。目先の政権争いといういわば小事にかまけ、せっかく手にした政党政治の仕組みを守り、鍛え上げていくという大事を忘れた。自分で自分の首を絞めたに等しい。

斎藤隆夫の肅軍演説は二・二六事件後の1936（昭和11）年、反軍演説は40（同15）年。時すでに遅し。衆院は斎藤に報いるに、除名の議決をもつてした。

歴史的な政権交代が早々に色あせ、政治が出口の見えない閉塞へいそくにあえぐいま、歴史の教訓がひときわ生々しい。

菅直人首相の後継選びが動き出したが、世に満ちる政党政治への嫌悪は晶子の時代に引けをとらないのではないか。

新政権をだれが担うにせよ、途方もなく荷は重い。数々の危機対応だけではない。政治それじたいの病をどう除いていくのが差し迫る。

歴史を踏まえた大局的な処方箋せんが書かれなければならない。

仙谷氏は「中庸」と「穏当」を言う。

白か黒か二つに一つ、極論をぶつけあうような政治はわかりやすい。しかし複雑化し多様化する現代において、常に単純明快な回答を出せといふのは無理な相談である。すべての「解」は灰色かもしれない。

政党政治も、二つの大政党が交互に政権を担うのが本当に現実にあうのか。複数政党の連立、連合による政治が常のことになって不思議はないのではないか。

そう考えれば、衆院の選挙制度を比例代表中心の仕組みに変えることが十分選択肢になると仙谷氏はいふ。政治のかたちを再び大きく転換させる力業である。

これに対し田中氏は政治のなかみから説き起こす。焦点は「消費税、放射能、公務員（政官関係）」の三つ。これらが内容本位の政界再編の軸になると見る。

「次の総選挙後には、この3点をめぐる立ち位置によって、50人から60人くらいの政党が四つ五つできる可能性がある。それらが時々の争点により二つか三つで中連立を構成するかたちになっていけばいい」

66年目の酷暑の夏、どんなシナリオを描くにせよ、大きな変動を視野に入れることなしには出口を見いだせないところまで、政治は追いつめられている。